

148
377

脚 演
本 劇
歎 討 御 未 刻 太 鼓

088468-000-0

特52-612

歎討御未刻太鼓 上の巻

松本 平助/著

M27

DBJ-0122



演劇脚本 歌討御未刻太鼓

著述者 松本平



全編五幕場前目次

序 徳島春日祭の場 一幕目 磯貝邸坐敷の場

三幕目 六十間橋詰の場 四幕目 大阪四ッ橋の場

五幕目 御堂前復讐の場

著者云本編は故長谷川千四子の著せし院本に據り増補改訂更に演劇脚本とせし者今上の巻を刊し遂次刊行す

演劇 脚本 歌討御未刻太鼓上の巻

著述者 松本平助

徳島春日祭の場

島川 太兵衛 仲間 縫助

浅野 彌左衛門 仲間 角平

仲間 藤助 腰元 かさこ

本舞臺中央一間常足の二重欄間より幕を張り毛氈を敷き屏風を立て上手へ石の鳥居下手例の立樹後ろ淺黄暮宮神樂にて幕開くと二重に御神事係島川太兵衛相役淺野彌左衛門袴羽織にて坐り居る幕開くと馬鹿離子になり

浅野「太兵衛殿何んと思召す夥しい御祭禮御當地の春日でさへ此通りなれば南都は噓と思ひ遣らるゝ爾り乍ら神明の物好き悪い時分寒氣甚たしいどうぶくら何ん

程獅子舞だんじりか参つても西瓜は無し眞桑は無し冷索麵の顔を見ねば祭の様
に御坐ない夫れに今朝から神主が馳走とて薑酒鱈雜水悉皆大阪の顔見世見物ら
やうさや／＼とは申さいで、さホになれ／＼と云ひ度御坐るハ、ハ、ハ、

島川「被仰る通り京の祇園會大阪の坐摩天神住吉の御拂ひ等の時分は風も立すせは
／＼其致さぬが是は又暑氣の最中手前が様に肥滿致した者は猶更帷子を打ぬい
て袴迄汗に成るを存れば寒い方が増で御坐るイヤ未だ當年は温かで仕合せいつ
もは大方大雪が致す御祭の荒れとやし申て極つて風雨升が明神の御機嫌が好い
故で御坐ろふ殿様にも當年の御神事は殊無い御機嫌

浅野「今日は濱御殿へお成りに成り神輿を拜なされ暮掛けて提灯の火を御一覽遊す
筈

島川「噓今頃は御酒宴の最中で御座ろふ併し彌左殿神輿の御出は未だ尙も御座ろふ
暫時神主方へ参つて休息致さふでは御座らぬか
浅野「いか様左様致さふ

ト此時下手より仲間縫助角平友藏出て好き所にて平伏して
縫助「御神事の引馬
角平「お馬場前へ揃ふて

縫助「はんに左右じやなア」

上「口々に人事をいふ筈の上待ち退溜の伸び欠伸び」

同「ア、一最ふ何ん時で有ふなア」

角平「左右上此日脚では (ト空を眺める仕打)」

上「日脚を見やる松原へ息急きと来る女中のしよていさつても似たり杜若

の縫紋彼れは慥に左右じやが何んとして心の不審打間程なく近寄る顔

ト向ふよりおさご好みの唄にて出る直ぐ舞臺にかゝる友藏見て

友藏「コレおさご女郎じやないか」

さご「チイノ友藏殿急に逢ねば成ぬ事

トおさご友藏の手を引き上手へ行き小腰を屈める

友藏「何んとして御坐つた」

さご「何んとして所が親旦那も藤助様も只ツた今殿様から俄のお召兼て願ひの隠居

の望み今日仰付らるると御家老中から内證のお知せヤレ芽出度と取る物をも取

敢へず濱御殿へ御出仕ひよんな事じや無いかいな

友藏「夫れが何んのひよんな事芽出度といふて悦ぶ筈」

さご「あれ未だあんな事じや程にの

上「親旦那が隠居被爲るれば御名跡は藤助様お雪様との御祝言はせん

のはし (トよろしく仕打有て)

同「藤助様と已しとをねんごろさしたは此方の媒ち

上「彼のお雪様と此方を深に中にしてお雪様のお腹にもや〜迄でかさし

たは

同「藤助様と私とが媒ち

上「互の戀を取持ちあふて未掛けた夫婦の約束

同「親旦那のお歸り被爲れ藤助とお雪と夫婦にすると云ひ渡ししが有てからは取返へ

しの成ぬ表向き

上「思ふた中はちぐはぐお雪様も生ては居られぬ私も死ぬる早ふ戻つて談

合して下され

同「さア〜〜 (トおさご友藏をひき立てる友藏拂ひて)

友藏「いや〜いなれぬ大事の御神事捨て置ては旦那の落度まア先へいんで下され

ト友藏おさごにきつぱりと云ふ

演劇 脚本 敵討御未刻太鼓上の巻終

明治廿七年十月廿八日
明治廿七年十一月三日

印刷
發行

定價
四錢

京都市下京區東圓院佛光寺南入
高橋町十三番戶

著者 松本平助

京都市下京區七條通間之町東入
材木町六十八番戶

發行者 田中幸次郎

京都市下京區大和路四條南入
龜井町十六番戶

印刷者 坂田萬治郎

版權
興行權
所有

